

卒業研究要旨

女性の育児不安と幼児虐待

1999年 可児 智美

この卒業論文は社会病理として定着しつつある「幼児虐待」に焦点を当てて論じたものである。私がこの問題に興味を引かれたのは、母親が子どもに暴力を振るってしまうという普通では考えられない状況の裏に潜む複雑な原因にである。

「幼児虐待」について、社会の批判の声は厳しいものである。現代の母親たちは、この問題が話題にのぼると「無責任」「母性喪失」のレッテルを貼られてしまいがちである。しかし「幼児虐待」は母親の責任のみにおいて起こっている現象ではない。それは歴史的な要因、社会的な要因が多々に、複雑に絡みあって起こっている問題なのである。その原因として考えられる代表的な「母親の育児不安」「母性神話」「母親を取り巻く状況」に論点を絞り、現代女性が背負う苦悩、「幼児虐待」問題対策の現状と問題点、幼児虐待がもたらす弊害などについて論じていきたい。

第1章では、「幼児虐待」の現状と具体例を挙げ、その実態に迫り、その次に「幼児虐待」を引き起こしている「育児不安」の原因を、「都市化」「少子化」「競争社会」「母親たちの人間関係」「自己喪失感」の視点から考察し、それらの原因を歴史的背景から追求していく。

第2章では、昨年11月に行なった「浜松市における家庭のしつけと性役割分業についての調査」を元にして作成した集計データから、「幼児虐待」の潜在性、女性のライフサイクルの変化に伴う価値観の変化、「母性神話」は一般的に定着しているのか、以上の3点について分析する。

最後の第3章では、虐待された子供たちに与えられる悪影響や、虐待の連鎖について論じ、「幼児虐待」に対する対策の現状と問題点に言及する。まとめとして、抽象的になってしまうが、今後の育児についてと、「母性神話」に対する意識改革への提言私なりの見解で述べたいと思う。